

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)

——『筠州洞山悟本禪師語録』の歌頌を通して——

伊 藤 秀 真

序

福井県宝慶寺二世・永平寺五世中興の義雲(一二五三—一三三三)が遺した『義雲和尚語録』(以下『義雲録』。龍堂即門編、一七一五年成立。『大正蔵』八二卷・『曹洞宗全書』(以下『曹全』)語録一所収)には、洞山良价(八〇七—八六九)の伝記・語録(以下「洞山の資料」)からの引用が随所にみられる。前稿(一)¹では、「洞山の資料」から『義雲録』への引用傾向について考察をしたが、『義雲録』にある「洞山の歌頌」の語句については除いていた。「洞山の歌頌」は、『洞山悟本大師語録』(以下『洞山録』)に収録されている。

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

現在、『洞山録』で確認ができる版本は、『瑞州洞山良价禪師語録』(以下「瑞州本」。雪嶠円信・郭凝之編、一六六五年成立。『大正蔵』四七卷・『統蔵』一一九卷所収)「瑞」、『筠州洞山悟本禪師語録』(以下「宜黙本」。宜黙玄契編、一七四〇年成立。『国訳禪宗叢書』(以下『禪叢』)一輯八卷所収)「宜」、『筠州洞山悟本禪師語録』(以下「指月本」。指月慧印編、一七六一年成立。『大正蔵』四七卷・『統蔵』一一九卷所収)「指」の三本である(「」内は典籍刊本の略表記)。

『洞山録』の表題にある「瑞州」と「筠州」の地名は、同じ地域を指している³。この異なった表題を附した背景は、資料が成立した当時の地名に依るものと推察される。

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

『洞山録』の構成は、次のように三本とも異なっている。
「瑞州本」は、語録のみである。語録の中には「功勳五位頌」、「宝鏡三昧」、「綱要頌」の内容が収録されている。
「筠州」を冠する「宜黙本」と「指月本」の二本については、収録列次に従って内容を一瞥したい。⁽⁴⁾

〔宜黙本〕

- ・洞山悟本大師語録序〔林泉元趾〕
- ・重集洞山悟本大師語要自序〔宜黙玄契〕
- ・洞山悟本禪師語録〔宜黙玄契編〕
- ・行由、歌頌(宝鏡三昧歌・玄中銘并序・新豊吟・綱要頌三首・五位頌五首・功勳頌・王子頌五首・真讚、附裁(自誠・規誠・辞北堂書・後寄北堂書・附嬢回書)、洞山悟本禪師語録之餘〔宜黙玄契校勘〕
- ・書洞山語録尾〔玄光寛城〕

〔指月本〕

- ・洞山大師語録序〔指月慧印〕
- ・筠州洞山悟本禪師語録
- ・歌頌(宝鏡三昧歌・玄中銘并序・新豊吟・綱要頌三首・五位頌訣並逐位頌・功勳五位頌・真讚・自誠・規誠・辞北堂書〔頌二首〕・後寄北堂書〔頌〕・附嬢回書)

- ・洞山悟本禪師語録之餘〔宜黙玄契校勘〕
- ・洞山悟本大師語録序〔林泉沙門と永瑗〔贊〕〕
- ・重集洞山悟本大師語要自序〔宜黙玄契〕
- ・書洞山語録尾〔玄光寛城と面山瑞方・宜黙玄契〕

右の通り、「宜黙本」と「指月本」には歌頌が収録されている。「宜黙本」には、「指月本」の歌頌に含まれている「自誠・規誠・辞北堂書・後寄北堂書・附嬢回書」が、附裁へと分けられているように、同名の版本であっても内容が異なっている。

『義雲録』に対応する「洞山の歌頌」の語句は、「筠州」を冠する二本の『洞山録』に収録されている「宝鏡三昧歌」⁽⁵⁾、「玄中銘」⁽⁶⁾、「新豊吟」⁽⁷⁾に認められる。「玄中銘」と「新豊吟」は、三本の『洞山録』より成立時期が早いとされる『禪門諸祖師偈頌』(原刊年不詳、『続蔵』一一六巻所収)にも収録されている。⁽⁸⁾

『義雲録』と「洞山の歌頌」との共通語句

本稿の目的は、『義雲録』の引用傾向を探るため、『義雲録』で用いられている「洞山の歌頌」に含まれる語句に基

づいて、特徴の分析を試みるものである。この検討では、『義雲録』の上堂・小参・法語・偈頌を対象にした（取り上げる資料は、前橋に準ずる。資料の対校は、後頁の附録を参照）。『義雲録』には、後述の機関に相当する部分を除く、次の六箇所に「洞山の歌頌」と対応する語句がある（○内の数字は、便宜上、『義雲録』の収録順に従って充てた列次番号。○内の数字は、前稿からの通し番号）。

- ⑧ 「白雲（倚山而）以山（而）為父。」（上・「玉慶寺語録」上堂35）、下・「永平寺語録」上堂30
- ⑨ 「銀椀之雪。」（上・「玉慶寺語録」上堂37）
- ⑩ 「新豊。」（上・「玉慶寺語録」上堂39）
- ⑪ 「夜半正明——天曉不露——。」（上・「永平寺語録」上堂24）
- ⑫ 「木人——石女——。」（下・「永平寺語録」上堂19）
- ⑬ 「先行不到。末後太過。」（下・「永平寺語録」上堂25）

⑧ 「白雲（倚山而）以山（而）為父。」

この句は上巻「宝慶寺語録」上堂35、下巻「永平寺語録」上堂30にあり、「玄中銘」の「青山白雲。」と対応する。

『義雲録』ではこの他に、上巻小参(4)「雲倚青山子帰

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二) (伊藤)

父。」、上巻偈頌(1)「青山深処白雲閑。」、下巻「永平寺語録」上堂(3)「白雲就青山之父。」、下巻小参(1)「白雲倚青山。為父為子。」と、恣意的な表現のようであるが、不動なる青山（平等）と起滅する白雲（差別）、父（真如）と子（修証）のように一貫した意味の語句がある。上巻「宝慶寺語録」上堂(3)「如父如子。」も、これと同様に捉えることができる。義雲は、この語句を反芻して幾度も用いていることが窺える。

この句は「洞山の資料」の『宏智録』、『永平広録』、『洞山録』に所載する。

『義雲録』でこの句が多く用いられているように、『宏智録』でも多用している。『宏智録』巻一と『洞山録』には、「頌曰」以下の五言絶句で表されている。これは、『祖堂集』巻二十の隠山龍山条にも認められる。

さて、この句に関する『義雲録』と『宏智録』の引用については、これまでに次の箇所の指摘がある。

- 上巻「宝慶寺語録」上堂(3)：『宏智録』巻四。¹²
- 上巻「宝慶寺語録」上堂(35)：『宏智録』巻一。¹³
- 下巻「永平寺語録」上堂(30)：同右。¹⁴

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

『義雲録』は、『宏智録』の語句を引いている。「瓊林寸寸宝。旃檀片片香」(附録の破線部を参照)の語句に着目すれば、宝慶寺三十世龍堂即門(*一七二二)が『義雲録』を編輯し、京都書肆柳枝軒で開版印行した版本(柳枝軒本)よりも成立年時が早い天和四年(二六八四)の筆写本(内閣文庫本)と、『宏智録』の字句が一致する。この二句については、『義雲録』の原本と「内閣文庫本」が、同じ字句であったと考えることもできる。

⑨ 「銀椀之雪。」

この四字は上巻「宝慶寺語録」(37)にあり、「宝鏡三昧歌」の「銀盃盛雪。」と対応する。この句は「宝鏡三昧歌」の他、「洞山の資料」に所載されていない。

「銀椀」は白く、「雪」も白い。白いもの一色で、色の待対を絶した状態のことを意味している。転じて、平等と差別のように相対するものが消滅し、痕跡を留めない様をいう。¹⁷⁾『義雲録』下巻に収録されている『義雲和尚略伝』(龍堂即門撰、一七二五年成立)には、「銀椀峯」の語句がある。¹⁸⁾

⑩ 「新豊。」

これは上巻「宝慶寺語録」(39)で用いられている、洞山を指す二字である。¹⁹⁾

この二字に関して、上巻「宝慶寺語録」(39)では「新豊曲」²⁰⁾、上巻「永平寺語録 提綱」では「新豊吟」、下巻「雲居道膺贊」では「新豊珍曲吟」と様々である。

さて、「洞山の歌頌」の「新豊吟」には、

新豊路兮峻仍巖。新豊洞兮湛然沃。(『大正藏』四七、五一五c)

とある。新豊の奥深い玄路は、峻峻であって、凡聖迷悟のまよいの世界に低迷している者には、足をすべらせて踏みこたえることができない。新豊山の洞水は、まんまんとたたえられ注がれ、凡聖迷悟のまよいにかかわらないので、少しの濁りもみせていない、ほどの意である。「新豊吟」のこの一節は、洞山の禅風を反映させた内容である。

「新豊」の二字は「洞山の資料」の『祖堂集』、『宋高僧伝』、『伝燈録』、『祖庭事苑』、『伝法記』、『宏智録』、『洞山録』の「瑞州本」に所載する。「筠州」を冠する二本の『洞山録』に収められている『洞山悟本大師語録序』に

も、この語句がある。⁽²⁰⁾「瑞州本」の割註には、「新豊老人」の語がある。⁽²¹⁾また、『永平開山道元禪師行狀建撕記』（以下『建撕記』、「瑞長本」一五八九年成立）に記されている義雲の贊にも、この二字がある。⁽²²⁾

『義雲録』の「新豊曲」の語句は、「洞山の歌頌」の一である「新豊吟」とみても構わないが、『宏智録』の「一曲新豊」を承けた洞山下の門風のことを表現しているようにも思う。『義雲録』と『宏智録』以外の「洞山の資料」には共通して、新豊洞の開創のことが記されている。石井修道氏によると、この一節は、会昌の破仏後に復僧した所を伝えていると説いている。また、『伝法記』には、新豊洞が邑の富豪であった雷衡の寄進になるものであり、大中末年、⁽²³⁾ここに洞山が住したという。この内容と『祖堂集』、『宋高僧伝』、『伝燈録』、『祖庭事苑』の各資料が一致している点を論じている。⁽²⁴⁾

⑪「夜半正明——天曉不露——」

この二句は上巻「永平寺語録」上堂(24)で用いられている。夜中とみれば明るく、夜が明けたとみれば暗いこと、

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

即ち平等と差別の捉え方を示している。

「宝鏡三昧歌」と「玄中銘」には、この二句の間に言句を入れることなく連続した句がある。この句は、「宝鏡三昧歌」と「玄中銘」の他、「洞山の資料」に所載されていない。

『義雲録』は、「夜半正明」に対して「望之被光礙。」と、分別を入れると本質が見えなくなる境地になることを示し、「天曉不露」に対して「覩之被眼瞞。」と、分別を入れなければ、仏法が現前とすることを説いている。

⑫「木人——石女——」

この二句は下巻「永平寺語録」上堂(19)にあり、「宝鏡三昧歌」の「木人方歌。石女起舞。」と対応する。「木人」も「石女」も情識をもたない、凡夫を超えたことを表現した語である。『義雲録』下巻に収録されている面山瑞方(一六八三—一七六九)の跋には、「宝鏡三昧歌」の二句をそのまま引用している箇所がある。下巻「永平寺語録」上堂(11)では、「石女——木人——」とこの字句を置換している。

この句に対応する「洞山の資料」は、『宏智録』と『如浄録』に所載する。『宏智録』では、「十玄談」(廻機)に類似した句が散見する。⁽²⁵⁾

下巻「永平寺語録」上堂(19)と『宏智録』巻一、下巻「永平寺語録」上堂(11)と『如浄録』の語句は、部分的に表現が重なっている。

⑬「先行不到。末後太過。」

この二句は下巻「永平寺語録」上堂(25)にあり、「玄中銘」の語句と同じである。先手がまだ辿りついていないのに、最後の手は行き過ぎたことを意味する、仏法の得難さを表した句である。

この句に対応する「洞山の資料」は、『宏智録』と『永平広録』に所載する。

「末後太過。」の三字目は、資料によって差異が認められる。

太…『宏智録』、『洞山録』[宜]、『義雲録』

甚…『洞山録』[指]

纔…『宏智録』、『永平広録』

『宏智録』では、この句が巻四に二箇所ある。しかし、同じ資料の巻であっても、この句の三字目は異なっている。

一つは『永平広録』と同じ「纔」を用いている箇所がある。⁽²⁶⁾『永平広録』は、『宏智録』の「解夏上堂」を引いている(附録の波線部を参照)。この二本は、共通して「先行不到猶迷己。末後纔過又借功。」の七言二句である。

もう一つは『義雲録』、「宜黙本」と同じ「太」を用いている箇所がある。⁽²⁷⁾『洞山録』よりも資料の成立が早い『禅門諸祖師偈頌』も「太」を充てている。⁽²⁸⁾

このように『義雲録』は、⑧⑩⑫⑬で『宏智録』と結びついていることが明らかである。『宏智録』以外の「洞山の資料」には、引用傾向の特色がみられなかった。その他にも『義雲録』には、次の「洞山の歌頌」に関連する語句がある。しかし、「洞山の資料」が典拠ではない。

・「千光」(上・小参(2))…『大智度論』巻二十五。⁽²⁹⁾

『義雲録』と「洞山の機関」との共通語句

さて、「洞山の歌頌」には学人を接得する手段、所謂、機関についての語句が存在する。

義雲が撰した資料には、幾つもの機関の語が含まれている。『義雲録』には三路、四借、四賓主、五位がある。義雲が編纂したとされる『永平秘密頂王三昧記』（以下「頂王三昧記」、成立年不詳。『統曹洞宗全書』へ以下『統曹全』）注解二所収⁽³⁰⁾には五位、三玄、三関がある。ここで挙げた機関で洞山に関するものは、三路と五位である。

本稿の目的に従って、『義雲録』と対応する次の機関についての部分を取り上げる。

⑭ 「五位列偏正。——無生那涉語因縁。」（上・「宝慶寺語録」上堂⁽³⁴⁾）

⑮ 「如何是鳥道。」（下・小参⁽¹⁾）

⑭ 「五位列偏正。——無生那涉語因縁。」

この句は上巻「宝慶寺語録」上堂⁽³⁴⁾にあり、「宝鏡三昧歌」の「重離六爻。偏正回互。晝而為三。変尽成五。」と対応する。これは、易の「離」と呼ばれる卦を二つ重ねる

『義雲和尚語録』引用資料の分析（二）（伊藤）

と、六爻の卦ができる。五位の偏（差別）と正（平等）が融合するさまが、これと似ている。重離六爻の形を三たび畳み、二度変化させると元に戻る。これは、洞山の五位説は正・偏・兼帯⁽³³⁾の三位によるものであるが、正中偏、偏中至、正中来、偏中至、兼中到へと開演したことを表している。

さて、この一節の前に四賓主を指している句があり、「四種分主賓。五位列偏正。」とある。この句に対応する「洞山の資料」は、『永平広録』である。石川力山氏は、「良久云。」以下の結句（附録の波線部を参照）に着目し、「宏智録」巻五との関係を指摘している。但し、『六祖壇経』を引いた「衆流投大海。」以下（附録の破線部を参照）⁽³⁶⁾を考慮するならば、寧ろ、『宏智録』巻四の方が上巻「宝慶寺語録」上堂⁽³⁴⁾と重なる部分が多くみられる。

⑮ 「如何是鳥道。」

この句は、下巻小参⁽¹⁾で三路の内容を表している一節にある。三路とは、洞山が学人接得のために設けた三手段であり、「鳥道」はその一である。「鳥道」とは、鳥が飛んだ

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

跡を残さないように、断消息でなければならぬことを意味する句である。原田弘道氏は、下巻小参(1)に対して、刃際に著せず、壁落なく、己船を絶したところに三路がある、と述べている。⁽³⁷⁾

「玄中銘」には、三路の一である「鳥道」と「玄路」の二字がある。また、「玄中銘」序にも「鳥道」の語句が用いられている。「鳥道」の二字は上巻小参(3)、上巻小仏事(3)、下巻「永平寺語録」上堂(4)にも存在する。

この句に対応する「洞山の資料」は『祖堂集』、『伝燈録』、『人天眼目』、『統要集』、『宏智録』、(歌頌以外の)『洞山録』に所載する。⁽³⁸⁾

ところで、下巻小参(1)のように、この句の前に(a)「洞山有三路学。——」とあり、三路のことを説いている資料(附録の破線部を参照)と、(b)「教学人行鳥道。未審。——不逢一人。」と、「鳥道」のみを示している資料、(c)「如何是鳥道」の句がなく、この一節の末尾を「軌持千里鉢林下路人悲」の語句で結ぶ資料がある。

(a)∴『宏智録』、『義雲録』

(b)∴『祖堂集』、『伝燈録』、『洞山録』

(c)∴『人天眼目』、『統要集』

この資料分類から、『義雲録』は『宏智録』を引いていることが分かる。この引用関係について、これまでに上巻小参(3)と巻一の指摘がある(附録の波線部を参照)。この他に、下巻小参(1)と巻五の文節も相応している。何れにしても、『義雲録』にある「鳥道」の語句は、『宏智録』を承けて引用されたことが窺える。

このように、『義雲録』は『宏智録』と結びついていることが明らかである。この他にも『義雲録』には、次の五位説に関する語句がある。しかし、これは曹山本寂(八四〇—九〇一)の「五位君臣頌」の句である。

・泥牛吼水月。⁽⁴⁰⁾木馬嘶春風。(下・永平寺語録)上堂(9)∴『人天眼目』卷三。

ここで、義雲が拵んだ五位について考えたい。延慶二年(一一三—四)、義雲は永平寺に入院してまもなく、宗可侍者(生卒年不詳)を人元させた。⁽⁴¹⁾宗可は入元中に、浄慈寺の靈石如芝(生卒年不詳)と靈隱寺の独狐淳朋(一一二—五九—一三三六)に贊を賜っている。⁽⁴²⁾贊の記述から、義雲は宗可

が入元する前から、五位を用いていたようである。義雲は五位について、道元（一一〇〇—一二五三）の遺文に接して知ったという見方や、寂円に依って習得したとする説がある。⁴³ 義雲は、若年期に『正法眼蔵』を書写していることや、『義雲録』に『永平広録』を引いている部分があることから、⁴⁴ 道元の遺文に接していたことには合点がいく。しかし、寂円が義雲に五位を伝えたという記録が、寂円の伝記に遺っていない。

さて、『義雲録』には⑭上巻「宝慶寺語録」上堂³⁴に正中来、偏中至の語がある。⑮上巻小參³には「莫道鯤鯨無羽翼。今日親從鳥道迴。」（附録の波線部を参照）の句がある。この句が『宏智録』巻一にもあり、この中に正中偏、偏中正、正中来、偏中至、兼中到の語が含まれている。『義雲録』と『宏智録』の関係から、⑭で挙げた『義雲録』の五位は、宏智正覚（一〇九一—一一五七）が用いた五位の第三位、第四位に相当する。

一方、義雲が編纂したとされる『頂王三昧記』には、
正 不動^二万物。不捨^三纖毫。元無^二一位。任性^三發^三機用。
偏 絶氣息^三。暗裏分^三通^三処^三。

『義雲和尚語録』引用資料の分析（二）（伊藤）

正中来 及^二尽^三玄微^三。超^二脱^三功勳^三。無^二軌^三持^三無^二軌^三則^三。
兼中至 不論^二尽^三不^三尽^三。不^二存^三境^三不^二境^三。不^二空^三劫^三以^二前^三事^三。
兼中到 脚踏^二實^三地^三。眼^二超^三千^三聖^三。雖^二然^三与^二麼^三。以^二洞^三照^三心^三源^三。
兼中到 発^二内^三照^三。道^二理^三表^三位^三次^三。故^二五^三位^三權^三雖^二排^三。本^二是^三一^三位^三也。元^二来^三一^三人^三也。是^二即^三面^三壁^三底^三之^二当^三人^三也。汝^二等^三還^二識^三也。參。（『統曹全』注^二解^三二、一一〇a）

とあり、第四位が「兼中至」である。『宏智録』と異なるこの配列は、石霜楚円（九八六一—一〇三九）の五位に通じているという。⁴⁵ 『頂王三昧記』は、資料の成立時期が不詳である。祖師の名を借りて起源を遡った後世の資料ならば、これを義雲の五位とみることは難しい。

ところで、『月坡禪師語録』巻四（以下『月坡録』。月坡道印撰、一六八〇年成立。『統曹全』語録一・『大正蔵』八二卷所収）義雲伝には、上巻「宝慶寺語録」上堂³⁴を転じている部分がある。『月坡録』に転じたこの上堂語にある五位の第四位も、「兼中至」の語が展観している。月坡道印（一六三七—一七一六）は『洞山録』を通じて、⁴⁶ 五位の配列に意識を払っているはずである。ところが、石霜の五位に依るのか、『頂王三昧記』の存在を認めていたからなのか、『月坡録』義雲伝は、『義雲録』の第四位を置き換え

ている。⁽⁵⁰⁾ これも、義雲の五位とは認められない。

小結

本稿で扱った『義雲録』における引用資料の分析で、明らかになった点を次にまとめた。

(ア) 『義雲録』に引用されている「洞山の歌頌」の語句は、「洞山の資料」の中で『宏智録』と対応している部分が多い。

(イ) (ア) によって『義雲録』と『宏智録』は、「洞山の歌頌」の語句を何度も引いている特徴がある。その語句については部分的に用いたり、⑧のように変化をさせている箇所もある。

(ウ) ⑨⑩のように『宏智録』を引かず、『洞山録』から歌頌の語句を直接、『義雲録』が引用した部分もある。

(エ) ⑧⑬⑭では、『義雲録』と『永平広録』との関連が認められる。

前項で『月坡録』義雲伝の五位について取り上げたように、義雲の伝記資料には、『義雲録』の語句を換えて引いているものがあつた。『義雲録』と伝記資料との関係につ

いて、検証すべき問題がある。

前稿の検討では、『義雲録』の語句と共通する「洞山の資料」から、『宏智録』との関連や普遍的な引用傾向の特徴がみられなかった。しかし「洞山の歌頌」の語句に限れば、『宏智録』の傾倒が顕著であつた。

このように、洞山の歌頌と歌頌以外の語句では、異なつた引用形態であることが分かる。

註

(1) 拙稿『義雲和尚語録』引用資料の分析(一)——洞山良价の伝記・語録を事例として——(『東海佛教』五八、二〇一三年) 近刊。

(2) 洞山の語録資料には、歌頌が収録されている。ここで扱う歌頌とは、偈頌・漢詩類と和歌・和賛類の宗典の総称である。『大漢和辞典』巻六(大修館書店、一九五七年) 六四一 a ~ b にあるような、中国古来の伝統的な意味で用いていない。

(3) 鈴木哲雄『中国主要地名辞典』——隋・唐——(山喜房佛書林、二〇〇三年) 三三七〜三三八頁。

江西省の地名で、宝慶元年(一二二五)に瑞州、明に瑞州府となつた。六二四〜六二五年、五代南唐以降にも度々、筠

州の地名が用いられた。

(4) 「宜黙本」の「功勳頌」には、「異本作上堂次示問話僧頌」とある。また、「指月本」の「五位頭訣並逐位頌」には、「並撰曹山揀註故今載于此」とある。

(5) 「宝鏡三昧歌」は、四言九四句(三七六字)によって成立している(「宜黙本」(「禅叢」一一八、一一二頁)、「指月本」(「大正蔵」四七、一五a、b))。『人天眼目』(一一八八年序刊、『続蔵』一一三卷所収)卷三、『禅林僧宝伝』(一三三一年刊、『続蔵』一三七卷所収)卷一曹山本寂条に所載される。

(6) 「文中銘」は、一九一字の序と、四言五六句(二二四字)の銘(計四一五字)によって成立している(「宜黙本」(「禅叢」一一八、一一二〜一一三頁)、「指月本」(「大正蔵」四七、一五b、c))。

(7) 「新豊吟」は、七言三六句(二五二字)によって成立している(「宜黙本」(「禅叢」一一八、一一三〜一一四頁)、「指月本」(「大正蔵」四七、一五c))。洞山は、これを新豊山で作ったという。

(8) 「続蔵」一一六、四五七d、四五八b。

椎名宏雄『禅門諸祖師偈頌』の文献的考察(『禅学研究』の諸相)平文社、二〇〇三年)二二五頁によると、「宜黙本」収録の「文中銘」と「新豊吟」は、『禅門諸祖師偈頌』からの採録と推察している。

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

(9) 本稿で取り上げる「洞山の資料」は、『洞山録』の他、次の資料を(一部)略称で用いる。資料の詳細は、拙稿前掲論文を参照。

・『祖堂集』卷六、『宋高僧伝』卷十二、『伝燈録』(景德伝燈録)卷十五、『伝法記』(筠州洞山普利禅院伝法記)、『祖庭事苑』卷七、『統要集』(宗門統要集)卷七、『聯燈会要』(宗門聯燈会要)卷二十。三路については、『人天眼目』卷三を対校に加えた。

また、これまでに『義雲録』に関する書誌的研究が行われている、次の資料についても対象とする。

・『宏智録』(『宏智禅師広録』)、『如浄録』(『如浄和尚語録』)、『永平広録』(『永平道元和尚広録』)、『永平略録』(『永平元禅師語録』)、『三百則』(真字『正法眼蔵』)、『正法眼蔵』(仮字『正法眼蔵』)。

なお、『祖堂集』、『伝法記』、『統要集』と、『続蔵』に収録されている各資料は、影印本を使用した。

(10) 『宏智録』では、卷二を除いた八巻で関連語句が用いられている。

(11) 『祖堂集』五一、四一〜四二。

(12) 石川力山『義雲録』における『宏智録』引用の意義(『駒澤大学仏教学部研究紀要』三五、一九七七年)二八一、二九〇〜二九二頁。『宏智録』(「大正蔵」四八、五一c、五二a)に対応。

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

- 『永平広録』巻二・上堂⁽¹⁵⁸⁾「山乃父乃子。——為弟為兄。」
『全集』三、一〇二頁)と酷似している。
- (13) 同右、二九二頁。『宏智録』(『大正蔵』四八、九b)に対応。
- (14) 同右、二九四頁。『宏智録』(『大正蔵』四八、九b) c) に対応。
- (15) 国立公文書館に収蔵。詳しくは拙稿前掲論文、序・註(6)を参照。
- (16) 「銀椀」の「椀」は、「盃」として収載する資料がある。「椀」は、『大漢和辞典』巻六(大修館書店、一九五七年)四一a~b(文字番号、一五〇〇一)によると、わん。はち。食物を盛る小鉢。盃に同じ。
- 「盃」は、『大漢和辞典』巻八(大修館書店、一九五八年)一一二b(文字番号、二二九七九)によると、わん。はち。小さい盃。盃の深く長いもの。
- (17) 上巻・小参(1)には、宝慶寺の雪景色が記されている。また、上巻・偈頌(4)には、七言絶句で白銀の世界を表現している。
- (18) 『面山和尚広録』巻一四の「越前宝慶禪寺十六題詠」第十一には、「銀盃峰」とある(『曹全』語録三、五五〇b)。これは、宝慶寺の南方にある山名のことである。
- (19) 石井修道「新豊山と洞山—胡紹仁説と関連して—」(『印度学仏教学研究』四七一—、一九九八年)一二~一八頁。
- (20) 「宜黙本」(『禪叢』一一八、八九頁)、「指月本」(『大正蔵』四七、五一八a)。
- (21) 『大正蔵』四七、五二二c。
「雪峰覆盆」(淘米)の話で、『宏智録』巻三(『大正蔵』四八、三四a)からの引用。
- (22) 河村孝道編著『諸本校永平開山道元禪師行狀建擿記』(大修館書店、一九七五年)一一〇頁。
ここに「至今一調。調新豊。」とある。これは、義雲が元徳三年(一一三三)に記した贊の一節である(『義雲録』には未収録)。
- (23) 大中年間は、大中元年(八四七)~十四年(八六〇)。
- (24) 石井修道「洞山と洞山良价」(『駒澤大学仏教学部論集』七、一九七六年)一一六~一二七頁。
- (25) 『宏智録』には、巻一、二、四、五、七、八にこの二句が用いられている。巻四には、「宝鏡三昧歌」に基づいた句がある。
- 『伝燈録』巻二九の同安常察章に「十玄談」が収録されている。ここには、
木人夜半穿靴去。石女天明戴帽帰。(『大正蔵』五一、四五五c)
とある。これは、相対差別を絶した絶対平等のさとりの世界を表している。
- (26) 『大正蔵』四八、四八c~四九a。

(27) 同右、四一c。

(28) この句は、「禪門諸祖師偈頌」と「宜黙本」の語が共通している。「新豊吟」には、

看他早是虚擔鞵。(『禪叢』一一八、一一四頁)

*虚一空

とあり、「虚」の字が両本に共通している(「指月本」との対校を左に註記した)。

(29) 『大智度論』積初中四無畏義第四十(『大正藏』二五、二四二a)。「玄中銘」にこの語句がある。

(30) 『統曹全』注解二、一一七a～一五五a。表題下には、「小師比丘義雲編」とある。序の表題は『越州吉祥山永平寺秘密頂王三昧記』である。序の表題下には、「門人永平老衲義雲述」とある。

(31) 「宜黙本」(『禪叢』一一八、一一二頁)、「指月本」(『大正藏』四七、五二五a)。

『義雲録』には、「龜毛横握能質卦交凶」(上・贊六。『曹全』語録一、一八a)と、五位を示す語句がある。

(32) 五位とは、洞山が創唱した接化の手段として用いられているものである。「宜黙本」には、「五位」、「五位頌」、「功勳頌」、「王子頌」が収録されている(『禪叢』一一八、一一四～一一七頁)。曹山が洞山の五位説を宣揚し、後世では様々な解釈がなされている。

(33) 正・偏の立場を否定も肯定もしない、円転自在であるこ

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

と。『撫州曹山本寂禪師語録』には、

作家中不_レ無_二言語。不_レ涉_三有語無語。這個喚作「兼帶語。兼帶語全無_二的_一也。(『大正藏』四七、五四二a)

と、言語的表現に拘泥しないさまを示している。近年における兼帶思想についての研究では、洞山の創唱を否定する説もある。しかし、新井勝龍「兼帶思想と洞山良价」(『駒澤大学仏教学部論集』二五、一九九四年)四九～六三頁では、曹山に発揚されたが、洞山の真意であると論じている。

(34) 『永平広録』巻七・上堂(51)『全集』四、九四頁)にもみられる。

(35) 石川前掲論文、二八二～二八三、二九〇頁。

(36) 『南宗頓教最上大乗摩訶般若波羅蜜經六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經』(『大正藏』四八、三四〇b)。

(37) 原田弘道「中世禪宗における義雲の立場」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』三六、一九七八年)一四一頁。

(38) 『永平広録』巻六・上堂(43)『全集』四、二四頁)に、「鳥道」の語がある。しかし、「洞山の資料」との関係が明らかではない。

(39) 石川前掲論文、二九三頁。

(40) 『統藏』一一三、四三二c。

(41) 河村前掲書、一二三頁。

宗可が入元した期間は、四年間とある。但し、「瑞長本」と「延宝本」に記載がないことから、宗可の入元期間を断定

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

することはできない。

(42) 『義雲録』巻上には、独狐の贊(曹全)語録一、三頁)がある。ここに「談笑措君臣於五位。」とあり、五位を自在に自家葉籠中のものとして示している。

(43) 佐橋法龍「義雲の宗教とその歴史的地位」(『印度学仏教学研究』二二二、一九五四年)二八七〜二八八頁。

『建撕記』(河村前掲書、一二二〜一二三頁)に記されている、如浄が道元に『五位顯訣』を与えたことについて、「建撕記所伝は多少疑わしい点を残し」と論じている。

(44) 拙稿前掲論文、序を参照。

(45) 原田前掲論文、一四〇頁。

(46) 拙稿「寂円派相伝資料の現状(一)——義雲所伝の門参資料について」(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第十一回、二〇一〇年)三〇八頁。

(47) 『統曹全』語録一の表題は、「月坡道印全録」である。

(48) この上堂語は、『延宝伝燈録』義雲伝(『統曹全』史伝、六八三b〜六八四b)にも引用されている。

(49) 拙稿前掲論文(二〇一三年)、註(22)を参照。

(50) 義雲の五位は、永平寺入院中の義雲に参じていた臨濟僧の中巖円月(一三〇〇—一三七五)へと伝えられている。臨濟へと伝承されたことや月坡が黄檗に参じていたことも関係しているのだろうか。

中巖へと伝わった五位については、玉村竹三編「五山文学

新集」四(東京大学出版会、一九七〇年)「自歴譜」、『本朝高僧伝』卷三十三「円月伝」に、次の記述がある。

冬、到越前、参永平義雲、略通洞宗語言、(四一六頁)

冬如越前。参永平義雲禅师。略得五位訣。(『大日本仏教全書』一〇二、四五二a)

【附録】『義雲録』と「洞山の資料」との対校

本論では、『義雲録』の洞山に関する語句を中心に、「洞山の歌頌」を用いて、『義雲録』の典拠を考察した。

本編は、本論の⑧〜⑮で取り上げた「洞山の資料」を比較させたものである。資料の対照は、次の凡例に従って試みた。

- ・各資料の表題は、()内に略称の頭文字で示した。但し、『祖庭事苑』は(庭)、『伝法記』は(法)、『永平略録』は(略)とする(共通字句を表す傍線部は筆者による)。
- ・『義雲録』上巻は、正徳五年の「柳枝軒本」を底本として、「内閣文庫本」との語句の差異を左に註記した。なお、⑭では義雲の伝記資料を取り上げたことから、「内閣文庫本」は(内)、『月坡禅师語録』は(月)、『延宝伝燈録』は(延)と表して、校異を記した。

・『永平広録』は、「門鶴本」を底本として、「出山本」との語句の差異を左に註記した。

・『洞山録』は、「指月本」を底本として、『瑞州本』（瑞）と「宜黙本」（筠）について、語句の差異を左に註記した。

⑧

〔義〕結夏上堂。（中略）拈提祖師心印而護生。山高不礙雲倚。如父如子。谷虛有_レ心聲響。為_レ弟為_レ兄。既得_レ恁麼和同。還有_レ什麼行履。良久云。瓊樹寸寸宝。梅檀片片香。（上・『宝慶寺語録』上堂三一。『曹全』語録一、八 a）

*什一恁 樹一林

〔義〕上堂。白雲以_レ山而為_レ父。明月偈_レ水而為_レ家。未審。衲僧以_レ何而為_レ父。偈何而為_レ家。不見_レ道。從_レ仏口生。從_レ法化生。（以下略）

（上・『宝慶寺語録』上堂三五。同右、八 b）

〔義〕上堂。（中略）卓卓的的參学之機不_レ味。白雲倚_レ山而以_レ山為_レ父。（下・『永平寺語録』上堂三〇。同右、二七 b、二八 a）

〔宏〕上堂云。体_レ弥虚而普_レ応。用_レ弥美以常_レ如。所以古人道。青山白雲父。白雲青山児。白雲終日倚。青山終不_レ知。（以下略）（一。『大正藏』四八、四 a）

〔宏〕上堂云。生生死死。輪迴之迹無_レ窮。寂寂惺惺。真照之機不_レ味。雲倚_レ山而而父。（以下略）（一。同右、九 b、c）

〔宏〕結夏上堂。（中略）泥牛入海恰_レ半夜。木雞喚_レ月看_レ五更。雲倚_レ山是_レ父子。眼約眉為_レ兄弟。三世同參。成一段合宗家之事。大千等量破微塵。出自己之経。瓊林寸寸宝。旃檀片片香。（以下略）（四。同右、五一 c、五二 a）

〔永〕結夏上堂。仏祖心髓五六合。喚作_レ安居九旬。衲僧眼睛百千枚。喚

『義雲和尚語録』引用資料の分析（二）（伊藤）

作_レ護生三月。雲閑於_レ山。乃_レ父子。水清于_レ海。為_レ弟為_レ兄。骨肉同參。龍蛇一_レ弁。仏仏提_レ持這箇。喫飯著衣。人人保_レ任此事。安身立命。（以下略）（二。上堂一五八。『全集』三、一〇二頁）

〔洞〕僧問。如何是青山白雲父。師曰。不_レ森森者是。云。如何是白雲青山児。師曰。不_レ辨_レ東西者是。云。如何是白雲終日倚。師曰。去離不_レ得。云。如何是青山終不_レ知。師曰。不_レ顧視者是。乃_レ頌曰。青山白雲父。白雲青山児。白雲終日倚。青山終不_レ知。（大正藏）四七、五二 a）

*僧一師因僧（筠） 日一云（瑞） 云一僧云（瑞） 日一云（瑞） 辨一辨（瑞） 云一僧云（瑞） 日一云（瑞） 云一僧云（瑞） 日一云（瑞） 一云（瑞） 乃頌曰一ナシ（瑞）

⑨ 〔義〕上堂。春來弄_レ薔薇之花。冬至吟_レ銀柳之雪。古德云。心隨_レ万境。転_レ転_レ転_レ能_レ幽。随_レ流認_レ得_レ性。無_レ喜亦無_レ憂。（上・『宝慶寺語録』上堂三七。『曹全』語録一、九 a）

*花一華

⑩ 〔義〕当初祖三十三回忌陞座。（中略）頌云。師子吼時衆_レ獸喪。死中得_レ活却和同。一声奏出新_レ樂曲。觀自在門徒_レ此通。（上・『宝慶寺語録』上堂三九。『曹全』語録一、九 a、b）

〔祖〕止_レ大中末間。住_レ于新豐山。大弘_レ禪要時。有_レ人。（二一五）

〔宋〕大中末。於_レ新豐山。大行_レ禪法。後盛_レ化豫章高安洞山。（『大正藏』五〇、七八〇 a）

〔伝〕師曰。說_レ仏界道界。病大小。初因_レ此遷化。師_レ至_レ唐大中末。於_レ新豐山。接_レ誘_レ学徒。厥_レ後盛_レ化豫章高安之洞山。（『大正藏』五一、三二）

『義雲和尚語錄』引用資料の分析(二)(伊藤)

二 a)

〔法〕儀南至高安之所〔音〕豊洞。邑豪雷衝之山也。見其泉石幽奇、乃曰、此大乘所居之地。言於雷氏、雷氏施之。初山多蛇虎、師庵居一宿、蛇虎尽去、至今山無虎焉。(一〇八九—八六d)

〔庭〕唐宣宗大中之末唱道於新豊、晚遷洞山。(『統藏』一一三、一〇六b)

〔宏〕送淵上人朱糸不用挂燒桐。一曲新豊為送公。(以下略)(八。『大正藏』四八、九一a)

〔洞〕師云、我不重レ先師道德レ弘法。祇重他不為我說破。云、和尚為先師設齋、還肯先師也無。師云、半肯半不肯。云、為甚麼不全肯。師云、若全肯、即孤負先師也。師自唐大中末、於新豊山、接誘学徒。厥後盛レ化豫章高安之洞山。(瑞州本。『大正藏』四七、五二〇b)

①〔義〕中秋上堂。蒲団功就起三昧。大用現前照世間。夜半正明。望レ之被光礙。天曉不露。覷レ之被眼瞞。(上・『永平寺語錄』上堂二四。『曹全』語錄一、一四b)

②

〔義〕為レ誦首座上堂。吉祥雲白。山林為瑞。洞水派分。性海收瀾。東閣叢席。座頭唱大。北陸戲場合殺筵寒。玉兔懷胎走碧空。駟馬追不及。金烏抱卵落潭底。俊鷹覷不看。石女抛杼拭淚。木人失友迷肝。(以下略)(下・『永平寺語錄』上堂一一。『曹全』語錄一、二三b—二四a)

〔義〕上堂。胡種族道。木人把劫前印。印泥水印レ虚空。石女分レ肘後符。護賊軍護家子。一人化大開恩沢。万国妥估歌太平。(以下

略)(下・『永平寺語錄』上堂一九。同右、二五a—b)

〔宏〕上堂云。環中隱照。蟄龍吟枯木之雲。量外真明。老兔弄夜輪之魄。機前後レ路。石女能レ分レ肘後印レ章。木人得レ用。直得一印印レ遍虚空。法界更無遺餘。諸人還体悉得麼。六門通曉意。大地絕纖塵。(一。『大正藏』四八、二二a)

〔宏〕上堂僧問。(中略)師云。木人嶺上歌。石女溪辺舞。(以下略)(四。同右、三九c—四〇a)

〔如〕請緣西堂。再充首座。上堂。當堂不露。主人翁元是旧時。借影全彰。第一座屈煩今日。雪夜金烏歷堂炎天玉兔轉懷。妙協兒孫。全該祖父。木人執レ板雲中拍。石女含レ牽水底吸。雖然如是且道。垂手那辺一句。又作麼生。陋巷不騎金色馬。回途却著破爛衫。(『大正藏』四八、一二二c)

⑬

〔義〕上堂。具レ十方通徹眼レ底人。不能針眼裏レ藏レ身。(中略)為レ甚如是。先行不到。末後太過。雖然怎麼。我者裏不レ然。良久曰。行時同レ步。臥時レ一床。(下・『永平寺語錄』上堂二五。『曹全』語錄一、二六b)

〔宏〕上堂拳。僧問石霜。如何是和尚深深處。霜云。無レ鬚鎖子兩頭搖。師云。先行不到。末後太過。一著中間見也麼。纒形黑白分生殺。帶累樵人爛斧柯。(四。『大正藏』四八、四一c)

〔宏〕解夏上堂。十五日已前。頭上不著七宝冠。十五日已後。脚下掣レ斷五色線。頭上不著七宝冠。正坐不見坐。脚下掣レ斷五色線。正去不見去。正当十五日。覷レ破面頭。直得君臣道合。父子氣和。琉璃殿上。玉女搖レ頭。明月堂前。石人無レ掌。退二步也。万仞崖前撒レ手。進二步也。百尺竿頭轉レ身。生滅去來。動靜出沒。只在

箇時撮聚。許多機要。放行把住。總在我儂。且道。正恁麼時如何。還會麼。先行不_レ到猶迷_レ己。末後纔過又借_レ功。(四。同右四八c) 〇四九a)

〔永〕解夏上堂。云。宏智禪師住_レ天童時。解夏上堂云。十五日已前。頭上不_レ著_レ七宝冠。十五日已後。脚下掣_レ斷五色線。頭上不_レ著_レ七宝冠。正坐不_レ見_レ坐。脚下掣_レ斷五色線。正去不_レ見_レ去。正當十五日。觀_レ破_レ阿頭。直得_レ君臣道合。父子氣和。琉璃殿上。玉女搖頭。明月堂前。石人無_レ掌。退_レ一步也。万仞崖前撒_レ手。進_レ一步也。百尺竿頭轉_レ身。生滅去來。動靜出沒。只在_レ箇時。撮聚許多機要。放行把住。總在我儂。且道。正恁麼時如何。還會麼。先行不_レ到猶迷_レ己。末後纔過又借_レ功。師云。這箇是宏智古仏解夏底句。永平聊有_レ同聲相應底句。大眾要_レ聽麼。(以下略)(四・上堂三四一。『全集』三、二二〇頁)

⑭ 〔義〕上堂。衆流投_レ大海。鹹淡味_レ同。四夷掃_レ一朝。君臣道_レ合。所以。四種分_レ主賓。五位列_レ偏正。雖然如是。立_レ正則正外無_レ偏。五位俱_レ正中來。立_レ偏則偏外無_レ正。万物各偏_レ中至。不_レ見_レ道。我逢_レ人則不_レ出。出則便為_レ人。我逢_レ人則便出。出則便不_レ為_レ人。良久云。偏正不_レ曾離_レ本位。無生那涉_レ語_レ因緣。(上・「宝慶寺語錄」上堂三四。『曹全』語錄一、八b)

*堂一_レ堂云(月) 主賓(賓主)(月) 俱一_レ共(延) 偏兼(月) 便一_レナシ(内、月、延) 便一_レナシ(月、延) 云一_レ日(延)
〔宏〕結夏上堂云。住無住相。去來之迹誰_レ与。得_レ無得_レ心。物我之功自遣。巴裏無_レ外。十方世界是箇伽藍。平等無_レ差。一切衆生皆體眷屬。百川會海而成_レ一味。万法同性而成_レ一家。只如_レ護_レ生禁足底意。又作

『義雲和尚語錄』引用資料の分析(二)(伊藤)

麼生。還會麼。偏正不_レ曾離_レ本位。無生那涉_レ語_レ因緣。(四。『大正藏』四八、三九b)

〔宏〕小參僧問。(中略) 古今無_レ盡時。作麼生行履。偏正不_レ曾離_レ本位。無生那涉_レ語_レ因緣。(五。同右、五八c) 五九b)

〔永〕上堂。(中略) 我若坐時汝須_レ立。我若立時、爾須_レ坐。若也齊坐齊立、二俱瞎漢。所以洞山排_レ五位君臣、臨濟列_レ四種賓主。(以下略)(三・上堂二二。『全集』三、一四八) 一五〇頁)

*濟一齊

〔永〕解夏上堂。(中略) 良久云。園驢八百馬三千、補処雖_レ生_レ第四天。偏正不_レ曾離_レ本位。無生那得_レ語_レ因緣。(七・上堂五一。『全集』四、九四頁)

⑮ 〔義〕永平入院小參。(中略) 既得_レ恁麼手段。作麼生的當。莫_レ道_レ鯢鯨無_レ羽翼。今日親從_レ鳥道_レ回。(以下略)(上・小參三。『曹全』語錄一、一五b) 一六a)

〔義〕僧問古德。洞山有_レ路_レ学。如何是鳥道。德云。忒_レ無_レ蹤跡。糸毫_レ不_レ礙_レ身。問如何是玄路。云。円同_レ大虛。無_レ欠_レ無_レ餘。問如何是展手。云。當機的用的。的用的用。當機。永平老漢如何拈_レ頌。飛騰有_レ路足_レ下_レ無_レ糸。未_レ著_レ邊際。阿誰敢_レ窺。即是鳥道。十方無_レ壁落。四面絕_レ門闌。上未_レ作_レ攀仰。下亦絕_レ己躬。即是玄路。拈來也遍_レ身手眼不_レ曾_レ當。放下也手眼通身又多許。是法住_レ法位。世間相常然。即是展手。還有_レ不_レ涉_レ三路。向上一路_レ麼。仰之高。鑽_レ之堅珍重。(下・小參一。同右、三二b) 三三a)

〔祖〕即是問。承和尚有言。教人行_レ鳥道。未_レ審。如何是鳥道。師曰。不_レ逢_レ一人。僧曰。如何是行。師曰。是下_レ無_レ糸去。僧曰。莫_レ是本

『義雲和尚語録』引用資料の分析(二)(伊藤)

来人也無。師曰。闍梨因^レ什麼顛倒。僧去。学人有^レ何顛倒。師曰。若不顛倒。你因^レ什麼認^レ奴作^レ郎。僧曰。如何是本来人。師曰。不行^レ鳥道。(二一五九)

〔祖〕師亦來曰。展手而学。鳥道而学。玄路而学。宝寿不^レ肯出。(二一六四)

〔伝〕僧問。師尋常教学人行鳥道。未審。如何是鳥道。師曰。不逢一人。曰。如何行。師曰。直須足下無私去。曰。只如行鳥道。莫便是本来面目否。師曰。闍梨因^レ什麼顛倒。曰。什麼處是学人顛倒。師曰。若不顛倒。因^レ什麼認^レ奴作^レ郎。曰。如何是本来面目。師曰。不行^レ鳥道。師謂衆曰。知^レ有^レ私向上人一方有^レ語話分。(『大正藏』五一、三三二c)

〔人〕僧到^レ夾山。山問。近離甚麼。僧云。洞山夾山云。洞山有^レ何言句。僧云。和尚道。我有^レ三路^レ接^レ人。夾山云。有^レ何三路。僧云。鳥道玄路展手。山云。实有^レ此路。那僧云。是山云。鬼持^レ千里鉢林下道人悲。後浮山円鑑不^レ因^レ黄葉落^レ争知^レ是一秋。(洞山三路接人。『統藏』一一三、四三四c)

〔統〕師嘗問。僧甚処来。云。洞山。洞山有^レ何言教。曰。洞山尋^レ常許人。三路学^レ所謂玄路鳥路展手。師云。实有^レ此語。不。云。实有。師云。軌^レ持^レ千里鉢林下路人悲。(四五才)

〔宏〕小參云。(中略)小參僧問。如何是正中偏。師云。天共白雲曉。進云。如何是偏中正。師云。水和明月流。進云。如何是正中來。師云。莫道鯢鯨無^レ羽翼。今日親從^レ鳥道迴。進云。如何是偏中至。師云。当機不迴互。敵面無後先。進云。如何是兼中到。師云。宝殿無^レ人不^レ待立。不^レ種^レ梧桐^レ免^レ鳳来。進云。五位已蒙^レ師指示。向上還更有^レ事也無。師云有。進云。如何是向上事。師云。乍可^レ截^レ舌。誰敢当

頭。(以下略)(二)『大正藏』四八、一六a) 〔宏〕小參僧問記得。洞山和尚。有^レ三路学。鳥道・玄路・展手。如何是鳥道。師云。応^レ処無^レ蹤迹。杀^レ毫^レ不^レ礙^レ身。僧云。如何是玄路。師云。円^レ同^レ太虚。無^レ欠^レ無^レ餘。僧云。如何是展手。師云。当^レ機的用的用。的^レ当^レ機。(五。同右、六四a、b)

〔洞〕師示^レ衆曰。我有^レ三路接^レ人。鳥道玄路展手。僧問。師尋常教学人行鳥道。未審。如何是鳥道。師曰。不逢一人。云。如何行。師曰。直須足下無私去。云。祇如^レ行^レ鳥道。莫^レ便是本来面目否。師曰。闍梨因^レ甚顛倒。云。甚麼處是学人顛倒。師曰。若不顛倒。因^レ甚麼^レ却認^レ奴作^レ郎。云。如何是本来面目。師曰。不行^レ鳥道。(『大正藏』四七、五一a、b)

*師示^レ展手一ナシ(瑞) 曰一云(瑞) 云一僧云(瑞) 云一僧云(瑞) 曰一云(瑞) 云一僧云(瑞) 曰一云(瑞) 云一僧云(瑞) 曰一云(瑞)